

ともいき（共生）フェスティバル×ぶんきょうにこにこルーム
～学生と水遊びをしよう～の試み
—新型コロナウイルス感染予防対策の中で—

鳥丸 佐知子

2020年春（4月16日）に発令された緊急事態宣言からまもなく2年が経過しようとしている。この間私たちは「コロナ」という言葉に翻弄され続けてきた。屋外で自由にのびのびと走り回りたい子どもたちもその行動範囲を制限されストレスフルな毎日を送っている。新型コロナウイルス感染対策に十分配慮した上で、子どもたちに遊びの場を提供することはできないのか。本論は、その試行錯誤の中で生まれた「ともいき（共生）フェスティバル 2021」第1回目の実践報告である。

キーワード：コロナ禍、ともいき（共生）、地域交流、実践活動

1. はじめに

京都文教学園は、平成26（2014）年に学園創立110周年という節目を迎えた。それをきっかけとして地域協働研究教育センターを新設し、地域における大学の教育、研究、社会貢献を一体化し、地域・学生・教職員を巻き込んだ総合的な取り組みを支援・推進しようとした。またその成果を、大学の教育活動や地域の発展に還元、寄与することを使命とした。

その記念事業として始まった「ともいき（共生）フェスティバル」の本来の目的は、本学の建学の理念「ともいき（共生）のもと、教員・学生・地域住民・行政・企画等のステークホルダーを結びつけ、地域貢献と本学のファンづくりを行うこと」である。しかし、ここ数年はコロナの影響により、従来型の形での開催は難しくなっていた。

鳥丸（2019）¹⁾でも述べているように、このフェスティバル会場を訪れる地域住民の中には、就学前の乳幼児を連れてこのフェスティバルに参加する人もいる。また通常、子育て支援

の場として「ぶんきょうにこにこルーム」を利用している親子も多くいた。しかし当初の企画では、その年齢（主に乳児）を対象とした催し物について、ほぼ皆無の状態が続いていた。

平成29（2017）年、短期大学には幼児教育学科があるのだから、例えばゼミ単位で、このフェスティバルに参加してみてもどうかという話が持ち上がった。

当時、鳥丸ゼミでは前期と後期の各1回、グループ単位で「ぶんきょうにこにこルーム」での実践活動を行っていたが、ここでの対象は、主に、2歳以下の乳幼児とその母親であった。

この実践活動は保護者との関わりも可能になり、ゼミ生にとって大変有意義な体験となっている。しかし、利用者との関係により、対象は主に「乳児」とその母親が多かった。

保育の現場は「乳児」のみではない。「幼児」も存在する。現場に出てからは、地域交流なども含め、幼児やそれ以上の年齢の子どもと関わる機会も多くなるだろう。もし在学中に1度でもこれらの年代の子どもと関わるができる

実践の場があれば、学生にとっても、意味のある良い経験となるのではないかと。

そこで新たな試みとして「ともいきフェスティバル」への参加について、当時のゼミ生に投げかけてみた。反応は予想以上に良かった。将来、保育の現場で働く者がほとんどであると考え、地域住民との交流体験の一つとして、小学生もターゲットにしたこの実践も、やってみる価値があるのではないかという意見でまとまった。そこで授業の一部として、初めてこのフェスティバルへの参加に挑戦することになった。この年、ゼミ単位の参加は、烏丸ゼミ以外に他2ゼミが参加した。それぞれのゼミがその持ち味を生かしながら地域の子どもたちと触れ合い、初めての体験に多少の戸惑いはあったものの、大変意味ある実践活動となった。

その翌年から、幼児教育学科全体が（基本はゼミ単位で）このフェスティバルに参加することになった。さまざまなコーナーが開設され、会場には乳幼児連れの親子のみでなく、多くの親子連れが訪れ、大盛況のうちにフェスティバルを終えることができた。

ところが2020年春（4月16日）に緊急事態宣言が出されてから、さまざまな行事が中止や規模を縮小しての実施となった。「ともいきフェスティバル」も新型コロナウイルス感染予防のため規模が縮小され、短期大学の参加は取りやめになった。

現在（論文執筆当時）も緊急事態宣言や蔓延防止措置など、その時の状況によってさまざまな制限のかかる日々が続いている。例えば子育て支援の場の一つとして大きな役割を果たしている本学のにこにこルームも、現在は完全予約制になり、学生の実習の場としての利用も多くの制限がかかるようになった。

そのような流れの中で、本学の地域連携部

フィールドリサーチオフィスより、新たな企画についての相談があった。本来の「ともいき（共生）フェスティバル」の形態では、多くの人が集まり、密の状態は避けられない。しかし対象年齢を絞り、複数回にわたって催し物を企画することで、その問題は解消されるのではないかというのである。

議論を重ねた結果、「ともいき（共生）フェスティバル 2021」は最終的に4回に分けて実施されることになった。本論文は、その中で第1回目に実施された「ともいき（共生）フェスティバル×ぶんきょうにこにこルーム ～学生と水あそびをしよう～」の実践報告である。

2. 実践の概要

ともいき（共生）フェスティバル 2021

最初に、最終的に4回実施となった今回の企画の全容について示す。

<第1回>

「ともいき（共生）フェスティバル×ぶんきょうにこにこルーム～学生と水あそびをしよう～」

- ・日程：7月27日（火）
- ・午前の部：10:30～11:30
- ・午後の部：13:30～14:30
- ・定員：各回30名（親子合わせて）
- ・対象：0歳児～就学園のお子さんと保護者

<第2回>

「ともいき（共生）フェスティバル in 夏休み～キャンパスを探検～」

- ・日程：8月22日（日）
- ・午前の部：10:00～11:30
- ・午後の部：13:30～15:00
- ・定員：各回30名（親子合わせて）
- ・対象：小学生 ＊保護者同伴

<第3回>

「ともいき（共生）フェスティバル×ぶんきょうにこにこルーム～学生とアートあそびをしよう～」

- ・日程：9月4日（土）
- ・午前の部：10:30～11:30
午後の部：13:30～14:30
- ・定員：各回20名（親子合わせて）
- ・対象：0歳児～就学園のお子さんと保護者

<第4回>

「ともいき（共生）フェスティバル2021」

- ・日程：12月11日（土）
- ・午前の部：10:30～12:00
午後の部：14:00～15:30
- ・定員：100名（親子合わせて）
- ・対象：
【参加者】0歳児～小学生と保護者
【出展者】本学学生・本学教員・企業・行政・団体・高校生

※なお4回目の開催については、対面と非対面の両方の企画が予定されており、11月30日が最終的な対面開催可否かの判断の日となった。

それでは今回紹介する第1回目の詳細について以下にまとめていく。

<第1回>

「ともいき（共生）フェスティバル×ぶんきょうにこにこルーム～学生と水あそびをしよう～」

- ・日時：2021年7月27日（火）
午前の部：10:30～11:30
午後の部：13:30～14:30
- ・場所：京都文教大学・短期大学
- ・定員：各回30名（親子合わせて）

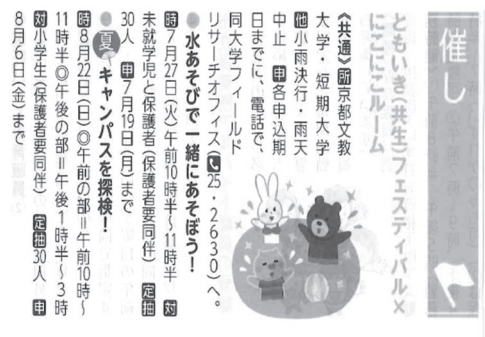
- ・対象：0歳～就学前のお子さんと保護者
- ・内容：学生が考えた水あそびで一緒にあそぼう！（小雨決行）
- ・備考：要事前申込制・参加無料
※鳥丸佐知子先生（幼児教育学科）のゼミ生が水あそび等を実施

プログラム内容が決められたことによって、対象が基本的には就学前の乳幼児であること（兄弟等の参加で一部小学生となる可能性有）、一回の定員は上限30名であり、家族単位で考えると10～15家族程度との予想がつくことなどが明らかになった。

また開催場所はサロンド・パドマ裏の芝生で、コロナ禍でもあり、密を避けるため、家族ごとに1個のたらいを用意。他の家族との接触を避けるため、たらい間の距離を2～3メートル以上離して配置することになった。

また、当日は午前と午後の部があるが、間に設けられた2時間で、午前中に使用済みのたらいやおもちゃの消毒をすることも決められた。なお、学生が作成した水遊び用のおもちゃについては、参加した子どもたちへのお土産として持って帰ってもらうことにした。

また、市政だよりやにこにこ通信等を通じて、催し物の宣伝と参加者募集が行われた。



ともいき (共生) フェスティバル 2021

無料
（入場・参加費無料）

「ともいき」フェスティバルは、地域のみなさんに向けて大学を開放し、子どもからご年配の方、障がい当事者や留学生等、様々な人々が集い、楽しみながら交流する場として2014年より開催しています。昨年度も、新型コロナウイルスの影響拡大を受け、実施ができませんでした。今年度も、感染予防対策を徹底し、主に地域の親子や子どもを対象に、7月～9月に小規模なものを3回、12月にオンライン交流を1回、計4回の実施を計画しています。今年に紹介するものは、すべて事前申し込みが必要ですが、夏休みのお楽しみとして、ご家族でも申し込みいただけるイベントにさせていただきます。

主催：京都文教大学・京都文教短期大学／後援：宇治市・宇治市教育委員会

第1弾：ともいき (共生) フェスティバル×ふんきょうにこにこルーム ～学生と水あそびをしよう～

7月27日(火) 10:30～11:30 / 13:30～14:30

第2弾：ともいき (共生) フェスティバル in 夏休み ～キャンパスを探索しよう～

8月22日(日) 10:00～11:30 / 13:30～15:00

第3弾：ともいき (共生) フェスティバル×ふんきょうにこにこルーム ～学生とアートあそびをしよう～

9月4日(土) 10:30～11:30 / 13:30～14:30

ともいき (共生) フェスティバル 2021

第1弾：ともいき (共生) フェスティバル×ふんきょうにこにこルーム
～学生と水あそびをしよう～

日時：2021年7月27日(火) 午前の部 10:30～11:30 / 午後の部 13:30～14:30
会場：京都文教大学・短期大学
定員：各回30名（親子含めて）
対象：0歳～就学前のお子さんと保護者
内容：学生が考えた水あそびを一緒に楽しもう！（小雨決行）
備考：要事前申込制（※切：7月19日（月）／応募多数の場合は抽選）※上記QRコードからお申込ください
参加無料

第2弾：ともいき (共生) フェスティバル in 夏休み
～キャンパスを探索しよう～

日時：2021年8月22日(日) 午前の部 10:00～11:30 / 午後の部 13:30～15:00
会場：京都文教大学・短期大学
定員：各回20名（親子含めて）
対象：小学生とその保護者（保護者同伴で参加ください）
内容：学生が考えたキャンパス内を探索しよう！（小雨決行）
備考：要事前申込制（※切：8月6日（金）／応募多数の場合は抽選）※上記QRコードからお申込ください
参加無料

第3弾：ともいき (共生) フェスティバル×ふんきょうにこにこルーム
～学生とアートあそびをしよう～

日時：2021年9月4日(土) 午前の部 10:30～11:30 / 午後の部 13:30～14:30
会場：京都文教大学・短期大学
定員：各回20名（親子含めて）
対象：0歳～就学前のお子さんと保護者
内容：学生が考えたキャンパス内を探索しよう！（小雨決行）
備考：要事前申込制（※切：8月23日（月）／応募多数の場合は抽選）※上記QRコードからお申込ください
参加無料

京都文教大学・短期大学 社会連携部 フィールドリサーチオフィス
TEL: 0774-25-2630 E-MAIL: fro@po.kbu.ac.jp
（本学HP） <http://www.kbu.ac.jp/kbu/>
〒611-0041 京都府宇治市東園南平足80
【アクセス】
○近鉄「向島」駅からスクールバス（無料：約5分）
○当日のバスはスクールバスではなく本学専用車。
○自転車・バイクは本学駐輪場をご利用ください。
○お車で訪れる方は近くのコインパーキングをご利用ください。

左は「ともいき（共生）フェスティバル」のプログラムである。小雨なら決行、大雨の場合はリズムレッスン室で参加者とゼミ生が自由に遊ぶことも決められた。

以上を受けて、ゼミでの準備が始められた。ゼミ内を2つのグループに分け、他の授業内でも使用した、某子ども園の水遊びに関するドキュメンテーション等も参考に、今回参加予定の対象年齢を考えたとき、どんな水遊びが適しているか、また手作りで、どのような水遊び用のおもちゃ作りが可能か、当日の役割分担や、おもちゃ等の配置などについても話し合われた。

その結果、夏祭りの屋台のようにいくつかの遊びコーナーを作るのはどうかという案が出た。また具体的に作るおもちゃとして、①ペットボトルの水鉄砲、②金魚すくいや（スーパー）ボールすくい、③色水作り、④色のついた氷や中に花が入った氷作り、⑤泡ジュース、⑥ヨーヨー、⑦水ふうせん、⑧シャワー、⑨シャボン玉、⑩（牛乳パックで作った）魚釣り等の意見が出された。

当日は乳児も参加する可能性があることなどを考え、この中から①⑤⑦⑩の4つを選択した。①と⑩のついては、ゼミの時間を使用して試作品を作り、さらに改良を重ねて当日に望んだ。

参加者については、事前に市政だよりやふんきょうにこにこルームの「にこにこ通信」で募集をかけたが、その結果、午前中18組44名、午後11組29名の募集があった。そこで午前中の参加者については抽選を行った。当日参加者は、午前12組、大人13名、子ども18名（0歳：3名 1歳：6名 2歳：3名 3歳：3名 8歳：2名 11歳：1名）、午後11組25名、大人10名、子ども15名（0歳：4名 1歳：4名 2歳：2名 3歳：1名 5歳：4名）であった。

ともいき（共生）フェスティバル
～学生さんと水あそびをしよう～

**コラボ
企画**


7月27日(火) 10:30～11:30
13:30～14:30

対 象：0歳～就学前のお子さまと保護者
定 員：各回 親子合わせて30名
申込み：7月19日(月)まで

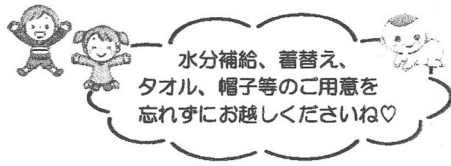
下記いずれかまでお電話又は直接
ひろばでお申込みください。
(申込み多数の場合は抽選)

☎ 0774-25-2525
(にこにこルーム)

☎ 0774-25-2630
(京都文教大学フィールド・リサーチ・オフィス)



幼児教育学科(短大)のお姉さんたちと
一緒に、お水あそびを楽しみましょう。
★濡れてもよい服・くつでお越しください。
★芝生ひろば等で実施(小雨決行)



3

鳥丸ゼミは現在11名で構成されていることから、当日は1家族にゼミ生1名を配置することにした。当日は天候にも恵まれ、イベントは大盛況のうちに終了した。

なお当日の参加者に対しては、本人確認、体温測定、体調確認（風邪のような症状がないか）が事前に行われた。

倫理的配慮

今回の論文では、データとしてゼミ生の自由記述を使用する部分がある。これについては、事前にゼミ生に対して、インフォームド・コンセントとして、今回の実践に関する報告書の中で、この自由記述を使用することを口頭で説明した。その上で、本研究への協力に同意したもの

のみを対象とした（全員が同意した）。また、記述は無記名で、教育・研究の目的以外には使用しないことも付け加えて、申し述べた。

3. 結 果

終了後、ゼミ生に対して無記名で自由記述形式による感想を求めた。その内容について質問項目別に示す。

①準備段階で感じたこと

- ・年齢によって楽しめる遊びが違うため、どの年齢の子どもにも楽しめる遊びを考えるのが難しかった。また活動を決めて準備をしてみて、実際に作って試しに遊んでみて気づく点が多くあり、早めに様々な状況を想定して準備に取り掛かることの重要性をとて感じた。
- ・手作りのもので沢山の水遊びの方法があるのだと知ることができた。頭で考えていても、実践するととなると、成功させるためにはいろんな課題があったり、子供たちの年齢やアレルギーなども考慮する必要があることを学んだ。
- ・イベントの前に授業があったため、当日準備予定だった水風船と泡ジュースの準備がすぐできなかった。思ったより、水風船に時間がかかった。みんなが遊んでいる間に作ったので、もうちょっと早くから作るべきだと思った。
- ・具体的な数などがよくわからず、何個用意するのか、どのような段取りで準備しておくのか、準備段階でも上手く話し合いが行われておらず、その場で動くという感じで不安があった。その他にも思っている以上に準備に時間がかかるというものが多かったように感じた。

- ・準備段階で感じたことは事前準備の大切さでした。おもちゃが足りるように人数分買っておくことや作っておくこと、どのようなおもちゃの使い方をしたら楽しく遊ぶことができるか、どのような置き方にしたら子どもたちが自分で遊び遊ぶことができるかなどを考えることがとても大切だと感じた。
- ・水遊びは水遊びでもいろいろな遊びがあることを知り、みんなで案を出し合って、子どもたちがどんなことをしたら楽しいかや、年齢に沿った遊びや準備物を考えるのはとても楽しくて、みんなで子どもたちが喜んでもらえるように準備して楽しかった。
- ・1歳児は水遊びをどう工夫したら楽しめるかなど企画を考えるのが楽しかった。泡で遊ぶ時、水遊び中に、大人も私たちも見ていても万が一、子どもが口に入れたら危険なので、そういった点も十分配慮しておかねばならないと思った。
- ・子ども、保護者の視点で考えた結果、それぞれのおもちゃが分かりやすいように看板を作ったり、イラストを書いてみたりと工夫することが出来た。おもちゃでは、実際に遊んで試した結果、釣竿の磁石の部分の接着や魚の大きさなど工夫しなければいけないことが見え、改良して子どもたちに楽しんでもらえたので、試すことの大切さを改めて実感した。
- ・まだ実習でも関わった事のない年齢だったので、どのような事をしたら喜んでくれるのかを考えるのが、すごく難しかった。また、1人に対してタライが1つだったので、家族で遊びを楽しめるようにしないといけない所が、1番難しかった。しかし、役割分担して進められたので良かった。

準備段階より、水遊び用の手作りおもちゃと

してどのようなものがあるか、いろいろと試行錯誤し、そこから作成したものだったので、水鉄砲が乳児にも好評だったことは、非常に励みとなったようである。改良することの大切さにも気づいた経験であった。また作り方を教えて欲しいという依頼もあったことも励みとなった。

②当日の様子（どんな親子と関わったか・うまくできたところ・反省点）

- ・私は1歳児の男の子と9ヶ月の男の子の親子と関わった。1歳児の男の子は、初め少し人見知りをして、目を合わせても笑わなかったり、少し緊張している様子だった。でも水をかけたり、お母さんと一緒に声をかけながら水鉄砲と一緒に飛ばしたりしていくうちに慣れてきてくれ、最後には走って私の方に嬉しそうに水鉄砲で水をかけに来てくれたので、とても嬉しかった。9か月の男の子は、水を全然怖がらない子どもで、自分からたらいの水に顔をつけにこうとする姿が見られ、水鉄砲で腕や顔に水をかけると喜んでくれた。割と1歳未満児さんには水鉄砲が好評で、それより上の年齢になると魚釣りを楽しんでいる様子だった。反省点としては、水鉄砲のストローを子どもがくわえそうになる場面が多く見られ、見守っていないと水を飲んでしまうところだったので、その配慮を考えるべきだったと思った。
- ・午前の部は1、2限の講義があったため、着いたときにはもう水遊びが始まっており、親子で楽しそうにしていたり、我が子の写真を撮られていて、入って行けるような雰囲気ではなかった。午後の部は、自分から子供たちの方へ行き、すぐ関わる事ができた。午前は、1歳児から11歳児の兄弟と関わり、午後は5

歳児の子どもと関わった。反省点としては、コミュニケーションが思ったより取れなかったことである。

- ・前半では水風船をつくるのに精一杯だったため、あまり親子とは関わるができなかった。大きい子どもが何人か前半にいたので、水風船が良く使われていた。1歳、2歳、3歳の子どもたちは、タライの中に入れて触感を楽しむ姿が見られた。4歳、5歳、6歳の大きい子どもたちは、水風船の上に投げてキャッチしたりと、年齢に異なって遊び方が違った。後半では、早めに水風船を使ったことで、いろんな親子と関わるができた。水で遊ぶのが初めての子どもがいたが、キラキラした宝石を水に入れて手を突っ込み探したり、魚のおもちゃを網で救ってみたりと楽しくやってくれていた。親子と関わるということで子どもだけでなくお母さんなどと喋る機会があったので、子どもの普段の様子など聞けることもあった。しかし、今まで親子と関わるということがあまりなかったので、声をかけに行くのに勇気がいると思った。
- ・今年から幼稚園に通い始めた子と、まだ言葉を話すことができない段階の子の兄弟を持つ方と関わらせていただいた。2:2で関わっていたためお兄ちゃんの方をもう一人の学生、弟の方が自分という感じで関わっていることが多かった。親御さんとそれなりに会話をしてコミュニケーションを取ったり、その関わっていた乳児のお子さんのやっていることを少し手助けしたり、水をかけてみて興味をひいたり関わる面ではうまくできたと思う。ただ、2人行動が多く、行動できる人がいなかったということから、1人で親子のところへ行くということに遠慮気味になり、おもちゃを並べたりすることがメインになってし

まったのは反省点である。

- ・1歳未満の子、3歳、小学生くらいの子どもたちに関わった。1歳未満の子たちが多く、やはり魚釣りは少し難しかったのか、あまり興味を示さなかった。また、おもちゃや自分の手を、すぐに口に持って行ってしまうので、口に入れても大丈夫な作り、配慮が必要だと感じた。水に興味を持ち、そのまま顔をつけてしまう子どももいて、瞬時に反応できたので良かったが、お喋りやよそ見をしていたら、溺れてしまうかもしれないと思うと、子どもから目を離すことは危険だなと実感した。
- ・当日は、1歳児の子どもや3.4歳時の兄弟と関わった。お母さんがいながら子どもたちと関わるのが難しく緊張した。3.4歳児の兄弟は、魚釣りや水鉄砲を特に楽しんでいる様子で、1歳児の子どもは魚を触ったり、じょうろで水を浴びたり触ったりしていた。一緒に遊ぶ中で自分もしっかりと水遊びを楽しみ、コミュニケーションをとることで、子どもたちも心を開き、一緒に水遊びを楽しみ関わってくれと感じた。
- ・当日はたくさんの子どもたちと親御さんが来てくれ、楽しそうに私たちが準備したもので遊んでいるのが印象的だった。私は1歳の子の親子と関わったのですが、1歳の子は水を体にかけてとても喜んでいて、水が好きなことがよくわかって、楽しそうで、こちらも嬉しい気持ちになった。
- ・私に関わった子どもは2歳児と、1歳児だった。2歳児は、おもちゃを使って水遊びも楽しんだり、水をかけあって遊んだりしていた。1歳児は、水の触感を楽しんだり冷たさを楽しんだりしていた。お母さんも子どもが楽しんでいる様子をみて楽しんでいらしゃった。2歳児には、「こんなおもちゃで遊んでみる？」

とか「他のおもちゃで遊んでみる？」などと話しかけて会話を楽しむことができ、子どもも楽しんでいる様子だったが、1歳児は、「楽しいね」、「冷たいね」、「きもちいね」などと同じような言葉をずっとかけていたので、子どもが楽しめているか不安だった。1歳児はまだ水がこわいということもあって、慣れるのに時間がかかったように感じた。

- ・当日私は、午前は生後8ヶ月、午後は生後6ヶ月のお子さんと関わった。関わる中で、どちらも水遊びが初めてという事もあり、水に慣れるまでは泣いたり、お母さんの膝の上から離れる事が出来なかったが、慣れてくるとおもちゃを水につけたり、タライでパシャパシャしたりと出来ていて、慣れるまでお母さんがいろんな声を掛けていて安心させようとしていた。「水遊びが楽しいよ」と保護者が伝える事で、安心して遊べるようになるし、関わりの中で、育児の面で大変な事なども聞く事が出来て良かった。

本学では保育園実習が2回生の8月から9月にかけて実施されており、この段階では未満児とは、ほとんどかかわったことのない学生も多くいた。最初は親子に近づくことさえためらう学生もいたが、徐々にその距離は縮まり、後半になるにつれて自然な関わりが可能になった。乳幼児とのかかわりだけでなく、その保護者とも話をする機会に恵まれ、学生にとってもよい経験となったようであった。

③準備に関しての反省点

- ・魚釣りのマグネットをシールタイプのものに変更したのが前日で、試してみたところ魚とひっつかないということが起き、急いでマグネットを買いに行くことということがあっ

た。何でも準備は早めに取り掛かるべきだと反省した。

- ・マグネットが思ったよりくっつかないという状況が起きてしまい、事前に確認すべきだったと思った。
- ・水風船に一つずつ水を入れるのに時間がかかったので、一気にいられるような道具を使ったといいと感じた。もうちょっと準備する時間を増やしたらいいかなと思った。また、水遊びを実施に楽しむ時間帯がとても暑い時間帯だったので、もうちょっと朝などにやったらよかったかなと思った。
- ・小さい子どもにとってわかりづらいところにおもちゃを置いていた点で、もっと小さい子ども自身も興味が持てるように置いたら良かった。
- ・乳児向けのおもちゃが多く作れなかった。、そこにも目線を向けられたら良かったと反省した。
- ・準備に関しての反省点は、風船を子どもたちが楽しみたいたくさん使ってくれたので、最後の方は、風船が足りなかった。もっとたくさんの風船を準備しておく必要があったと思った。
- ・前半でほとんどの水風船やペットボトルがなくなってしまうと、後半が少なくなってしまうと準備不足だった。もしこのような機会がまたあったら、次はもっとたくさんの量を準備しなくてはいけないと感じた。
- ・準備段階で水風船は人気がでるだろうと考えており、かなり多めに用意したつもりだったが、すぐになくなってしまったので、もっと多めに用意しておくべきだったと思った。
- ・磁石を大きくしたら、くっつかない事態が起きて、追加で磁石を足さないといけなくなり、少し竿が重たくなってしまったこと。

ここでは「魚釣り」の水遊びを考えたグループが、準備段階でも何度か試行錯誤を繰り返していたが、マグネットをつける方法で苦労した。また用意したおもちゃは、午前用と午後用に分けておくよう指導していたが、午前中に希望者に応じて渡してしまい、物によっては午後のおもちゃが不足するという事態を招いた。

④もし同じイベントをするとしたら、どこを改良したいか

- ・水鉄砲を大きくしてもっと距離遠くに飛ばせる遊べるようにしたい。また魚釣りの魚を一種類ではなく、数種類の様々な大きさのものを準備したいと思った。
- ・もっとたくさんの水遊び道具を作りたいし、もっと準備の時間を多く設けたい。
- ・手作りおもちゃの種類を増やしたり、おもちゃの数を余るくらいの数で用意するべきであったと感じたため、そこを主に改良したい。
- ・乳児が芝生をハイハイして、手についた芝生を口に持って行ってしまうので、ブルーシート等を敷いて実施したいと思った。
- ・もっとたくさん風船を準備しておくこと。また、水鉄砲を特に楽しんでいる子どもが多いと感じたため、水鉄砲の数を増やしておきたい。
- ・人気だった水鉄砲や水風船をもっと増やしたらいと思った。
- ・テントがあつたら日陰でより楽しめると思った。また準備は万端にして臨むことがいい。
- ・あらかじめ子どもの様子を考え、何をしたいか何が好きななど調べた上で取り組む必要があると思った。

実際に経験することによって「準備にかかる時間というのは、十分すぎるということはない」

と気付いた学生は多かった。このテーマに関しては、ゼミの中でも毎回指導しているのだが、具体的なイメージとして伝わりにくいことが多かった。実際に経験することにより、頭の中で描くイメージとは異なる部分も多いことに気付く良い機会ともなった。次回の実践でぜひ生かしてほしいものである。

次に参加された保護者からの感想について、まとめる。なおここでの内容は、にこにこルームより提供されたものである。

まず当日に関して、「(学生と一緒に遊べて)楽しかった」「また参加したい」などの意見が多かった。今回、ここで初めて水遊びを経験した子どもたちもいたが「水遊びができることが分かったので家でもやってみたい」という意見もあった。また、今回コロナ禍ということから、ひと家族ごとに一つのたらいを用意したが、それに関しても高評価であった。しかし一方で、少数意見ではあるが「水遊びは苦手なようで、早く切り上げた」というような意見もあった。また、もっと具体的に学生たちと遊べると期待してきた親御さんにとっては、今回の学生との触れ合いは物足りなさを感じた人もいた。

また後「また開催されないのか」との問い合わせや、当日はお土産として学生手作りのおもちゃ（ペットボトルの水鉄砲など）を持ち帰っていただいたが、それをお風呂でお父さんと遊んでいたという報告や、具体的な作り方を教えて欲しいなどの意見もあった。

4. 考 察

今回の実践は、ゼミの時間と重なる時間も利用しての活動となったため、直前の授業との関係で、時間に余裕がない形でこの活動をスタートした学生もいた。また、大変暑い中での屋外

活動も初めての経験であった。しかし結果的には、ゼミ生全員がこの活動に参加してよかったと感じていた。米倉他（2017）²⁾でも、地域連携としての取り組み事例が紹介されているが、学生側に過度の負担がない形ならば、今後も何らかの形で継続していきたいと感じた。

筆者自身は、機会があれば、在学中に可能な限り実践経験をしてほしいと考える立場にあるが、この1～2年はその機会も極端に減っていた。そのよう環境の中で、今回の企画も直前まで実際に実施することができるか否かがはっきりしないものであった。不安を抱えた中での実践だったが、その環境も含めて、筆者にとっても、ゼミ生にとっても大変貴重な経験となった。

その第一の要因として、これまでのぶんきょうにこにこルーム内での実践活動では経験することのできない親子とのふれあいがあったことがあげられる。

結果の中でも述べたように、7月の段階では保育園での実習を経験しておらず、未満児とは初めて関わる学生がほとんどであった。授業では習っていても、言語によるコミュニケーションが難しい年代の乳児と、実際どのように関われば良いのか不安を感じている学生も多かった。その不安からか、しばらくは水遊びの道具置き場から動けずにいる学生もいた。しかし時間が経過するにつれ、緊張は徐々にほぐれ、最初は恐る恐る近づいていた学生も、やがて自然に交流ができるようになった。

そこには、一緒に参加してくださった保護者の協力も大きかったであろうと思われる。また将来保育者を目指すものとして日々学んでいる彼女らにとって、初めて関わることのできる乳幼児は、それだけで大変興味のある対象であったことも想像できる。

今回、数種類の手作りの水遊びのおもちゃを

作成したが、年齢によって、興味を持つおもちゃが異なること、また同じおもちゃでも年齢によって遊び方が異なることなどにも、改めて気が付いたようであった。教材研究の大切さに改めて気付かされた経験でもあったであろう。

特にマグネットの問題で苦労し、牛乳パックを使用したことで、アレルギーなどの配慮が必要であることにも気付いた「魚釣りゲーム」は、結果的に乳幼児はあまり興味を示さず、小学生が中心に遊ぶことになった。水風船も乳幼児はその感触を楽しんでいたが、小学生は投げて遊ぶなどを目の当たりにし、もし次回同じことをするならどうするか問いには、彼女らなりに、経験したからこそ新たな気づきや工夫すべきところが記されていた。

当日はお天気に恵まれたという点では良かったが、それと引き換えに、特に午後からの実践では気温もかなり上昇した。繰り返し、水分補給をすることの呼びかけや、サロン・ド・パドマの中や日陰で休憩するよう呼びかけたが、遊びに夢中になると、現実にはなかなか実行されなかったり、草むらにたらいを置いたため、蚊などの虫さされ対策が十分でなかった点などは反省点として残された。

結果的に熱中症などの事例はなかったが、この時期の実践では、さまざまな配慮が必要であると改めて感じた。

当日と後日の参加者の感想から、一部お水遊びが苦手で早く切り上げたというお子さんもいたが、おおむね楽しんでいただけたのではないかと感じている。また1家族ごとにたらいを用意したことも、よい評価につながったようである。手作りおもちゃ（主に水鉄砲）についてはお土産として持ち帰っていただいたが、簡単な作り方などの説明書などを付けておくことも必要だったと気づかされた。

次年度の「ともいき（共生）フェスティバル」がどのような形になるのか今は定かではないが、今回、コロナ禍だからこそ企画されたこの試みは、「できないとあきらめではなくできることを模索していく」試みとしても、大変意義ある企画であったと感じる。

鳥丸ゼミとしても、これまでのにこにこルームの中での実践だけでなく、今回のような屋外での実践についても、今後も挑戦していきたい。

参考文献

- 1) 鳥丸佐知子（2019）保育ゼミにおける実践活動－ともいきフェスティバルに参加して－京都文教短期大学『研究紀要』第57集 91-96.
- 2) 米倉慶子，木村安宏，野口美乃里，川邊浩史，占部尊士，赤坂久子，金丸智美，春原淑雄，山口玲子，津上佳奈美，樋渡恵理子（2017）地域との連携取り組みにおける学生の学び－保育・教職実践演習の学びの一環として－西九州大学短期大学部，47，65-74.

